



らいさま

＜特集＞
子どもと大人の
サードプレイス

栃木県下野市は、雷とともに夕立が多い地域です。雷は昔から「雷（らい）さま」と呼ばれ、豊かな作物を育てる恵みの雨をもたらす存在としてあがめられてきました。雨降って地固まると言われるように、この情報紙が、豊かな地域づくりにつながるように「らいさま」と名付けました。

★下野市自治基本条例とは…

私たち市民にとって、よりよいまちづくりを進めるための基本的な考え方、ルールを定めた自治基本条例（平成26年4月制定）は、特別な規制を設けるものではなく、日々さまざまな活動を行っていく中で、よりよい下野市のまちづくりに役立てていこうとするものです。

LOCAL COMMUNITY
AND SHARE MARKET WEL

- P2 子どもから大人まで世代を越えた居場所づくり
- P3 カフェを通した居場所づくり
- P4 NPO法人 青二才～若者の活動支援～
- P5 カフェ「どろっぷ」で接点づくり
- P6 戦前の「青年学校」の役割とサードプレイス

令和7年 8月
VOL.21

子どもから大人まで世代を越えた居場所づくり

『LOCAL ACTION COMMUNITY AND SHARE MARKET WEL』



シェアスペースWEL店内

時代が生んだ文教通りのサードプレイス『シェアスペースWEL』

一級建築士でローカルプロデューサーでもある山口貴明さんが「なりたい自分になれる場所」「その日の気分でいられる場所」をコンセプトに、2024年2月に空き店舗を自分たちで改装しシェアスペースWELを開設しました。

ここは、シェアキッチン、シェアマーケット、作品展示や商品販売できるBOXフリマとして活用されています。「だがし屋まんまる」や「MATESHIP COFFEE」が店を構え、時にはタイレストランにもなります。

また、地方創生事業の一環であるシモツケ大学や、NPO法人青二才など、地域で活動するプレイヤーの拠点としても活用されるなど、様々な顔と役割を担っている場所です。

ここを拠点に活動している人たちは、偶然か必然か同じ思いを持ってこの場所に集まってきてそれぞれの活動を展開しています。

また、ここに訪れる人の層は厚く、小学生、中学生、高校生、大学生、大人も若者からご年配の方までと様々な世代の人たちが集う場所となっています。

共通して言えることは、自分らしく過ごせる場所、居心地の良い場所、サードプレイスの提供にあります。

シェアスペースWELはたくさんの人の思いで創られている場所で、今後さらに成長し続けていくことでしょう。

★サードプレイスとは★

家庭や学校（職場）では、様々なストレスを感じることもあり、生活をするだけで疲れてしまうことも少なくありません。ファーストプレイスである家庭はもちろん心安らぐ場所ですが、家族と関わるうえで、時には一定のストレスが生じます。また一日の大半を過ごすセカンドプレイスである学校や職場は、人と関わり目標を達成すべき社会空間のため、時には自分を偽り生活をしなければならないこともあり、ストレスがかかる場所となります。

こうしたストレスから解放され、一時的にでも自分らしくリラックスして過ごせる中立的な場所がサードプレイス。

そこは、誰もが自由に出入りができ、自ら望んでその場所に行き、無理に滞在する必要もない場所です。

現代を生きる子ども、大人に必要な場所となっています。



だがし屋まんまる



奥の棚はBOXフリマ365



カフェとタイ料理店



仕事、学習、遊び、誰でも無料で利用できるシェアスペース



つながッテルね！
条例9条2

（参画）

第9条の2 市民は、まちづくり及び市政に関心や問題意識を持ち、積極的な参画に努めるものとする

～ カフェを通した居場所づくり ～

『 MATESHIP COFFEE 』

「シェアスペース WEL」でカフェを営む高山洋太さんにお話を伺いました。

居場所づくりのきっかけ

大学卒業後、11年間、中学校、高等学校の教員をしていました。

教員時代に感じたことは、学校になじめない子が以前より多くなったことです。

不登校の生徒が年々増えています。この状況はコロナを挟んでさらに増えました。

居場所がないと悩んでいる子どもがいる一方で、親も悩んでいます。

学校以外の場所で、別なアプローチから悩んでいる人を支えたいと考えるようになりました。



MATESHIP COFFEE 高山さん

カフェを通して「自分らしくいられる場所」をつくりたいと思っていました。

近年では、悩んでいる心を打ち明ける場所はなかなかなく、聞いてもらいたい人もいれば、話したくない人もいます。ありのままの自分でいられる場所や人と人との接点を提供したいと思っています。

また、家で家族と生活しているだけでは状況は良くならない場合もあります。

現代社会では、様々な人々が様々な価値観を持っています。そんな中で、一つの学校(職場)だけで過ごすことは無理があるのかも知れません。

楽しそうにしている大人を見て 子どもは希望を持つ

最近は暗いニュースが多く、中には生きる希望を持ってない子どもも見られます。

大人になるのが嫌だと思っている子どももいるようです。

そうした状況を変えたいと思いました。

自分自身、教師を辞めてカフェを経営することは大きなチャレンジであり、教師として子どもたちにその姿を見せたいと思いました。

こんな自分の考えや思いを必要としている人にカフェを通して届けたいと思います。



MATESHIP COFFEE コーナー



べにまる

最近文教通りの様子が変わってきたね。児童館機能と公民館機能を併せ持つ石橋公民館が新設されたので、市民が主役となって街のにぎわいをたくさんつくってほしいね。



しまろ



つながッテルね!
条例13条3

(市民の責務)

第13条の3 自らがまちづくりの主体であることを自覚し、実践すること。

NPO法人 青二才 ～ 若者の活動支援 ～

「シェアスペース WEL」で活動している NPO法人 青二才の鈴木祐磨さんにお話を伺いました。

NPO法人 青二才の活動の目的は

- ①「若者が自分自身の可能性を信じることができる社会をつくること」
- ②「若者が自分らしさを表現できる地域をつくること」

です。若者の地域参画や若者の挑戦を支援する事業を通して、よりよい地域づくりを目指しています。

青二才という言葉には、青（若者）ニ（ニ）オ（才能）「若者イコール才能」と、若者は才能に満ち溢れているという意味が込められています。



NPO法人 青二才
代表 鈴木さん



現代では、高校生世代の社会の狭さ、学校と家庭以外での地域社会との接点が少ないことに疑問を抱き、高校生たちが地域で活躍すれば、地域の活力になり、また高校生たちも地域の中でサードプレイスとなる居場所ができると考え、活動を展開しています。

活動の一つである、「高校生もしもプロジェクト」は、下野市内での高校生の居場所づくりと、高校生のチャレンジを支援するプロジェクトです。これまで、石橋駅前でのカフェ「どろっぷ」の運営、高校生交流会、地域のお祭りでの屋台出店、高校生ラジオなど様々な活動を行っています。

鈴木さんの活動履歴

鈴木さんは 2020 年7月に下野市地域おこし協力隊として活動を始めました。官民連携による地域にぎわいづくりを目指しシモツケ大学を開校し、地域の中に新たなつながりや居場所をつくる取り組みや街全体をキャンパスとして、学びの場を創出する取り組みを行いました。地域おこし協力隊の任期はコロナ禍の特例措置も含めて3年8か月で終了となりましたが、活動は継続することが大事という思いからその後、NPO法人 青二才を立ち上げ、新たなステージへ進んでいます。

市民活動センター「しもぷら」の指定管理者としての役割

下野市市民活動センター「しもぷら」は、令和7年4月から指定管理者制度を導入し、NPO法人 青二才が管理運営を行っています。「市民が主役の市民と行政が協働するまちづくり」を基本理念として、市民が自主的に行う営利を目的としない社会貢献活動（市民活動）を支援することにより、市民との協働によるまちづくりを推進し、活力ある地域社会の実現を目指します。

また、NPO法人や市民活動団体、事業者等、多様な主体が連携し、協働するまちづくりの拠点としての役割を担っています。



市民活動センター



市民活動センター「しもぷら」もサードプレイスと言える場所だね！
様々な団体間で連携が生まれてくるといいね！



つながッテルね！
条例10条

（協働）

第10条 市民、議会及び市は、まちづくりを推進するために、それぞれの立場を理解し、目的を共有し、相互に依存することなく力を合わせて、その実現に努めるものとする。

カフェ「どろっぷ」で接点づくり



カフェ「どろっぷ」の運営メンバー

カフェ「どろっぷ」は NPO法人 青二才、一級建築士事務所 AMPworks とともに、高校生、若手社会人で運営されています。

石橋高校生をはじめとする石橋駅利用の高校生たちと接点をつくるため、通学の動線上である石橋駅前通りにある空き店舗を利用し月 2 回程度オープンしています。

「どろっぷ」という店名は、一粒あれば、ちょっと自分を甘やかしたり、誰かと打ち解けるのを手伝ってくれる、飴（ドロップ）とふらっと気分で寄り道をすることを意味する「drop by」という言葉から名付けられたそうです。

居場所づくりから交流へ

カフェ「どろっぷ」は居場所を提供するだけでなく、若者を中心としたイベントを開催することで、地域内に学校や家庭以外で多様な人々と交流できる場を創出しています。



カフェ「どろっぷ」店内

青二オスタッフ紹介

高山裕介さん

教職員を夢見て進学するも、地域で暮らしを楽しむ大人に憧れ、教職員以外の道にも興味を持つようになりました。その後、北海道、宮崎、島根といったローカルな土地を渡り歩き、現在は暮らしづくりやまちづくりに関わる取組を行っています。

星野浩輝さん

建築士として一級建築士事務所で働く傍ら青二才での活動にも参加し、カフェ「どろっぷ」も担当しています。まちづくりに興味を持ち、人と人との繋がりを意識した建築士を目指しています。

おいしいスコーンも作っています。

出番づくり

具体的には、高校生に地域での出番をつくり、その活動のサポートを行っています。

- ・カフェの出店スタッフとしての活動
- ・市内の地域活動でのボランティア
- ・高校生独自のプロジェクトの企画運営等

どろっぷ店内には
高校生の他、趣味の教室
に通う大人もつろいで
いました。



つながッテルね!
条例11条

(子どもの参画)

第11条 市民、議会及び市は、子どもを下野市の未来を担う地域の宝として育てるとともに、子どもがまちづくりに参画する機会を積極的につくり、その意見を尊重するものとする。



戦前の「青年学校」の役割とサードプレイス

元栃木県立文書館長 鈴木 健一



「青年学校」とはどんな教育機関？

ご年配の皆さんは、ご存じかもしれませんが、戦前にこのような学校がありました。下野市内には、「吉田村実業青年学校」、「薬師寺村実業青年学校」、「姿村青年学校」、「石橋町青年学校」、「国分寺村青年学校」と旧村に一校ずつ設置されていました。

1935（昭和10）年、国は小学校卒業後、農業に従事したり、工場や商店等に勤めたいいわゆる勤労青少年を対象として定時制の学校兼社会教育施設を設立しました。陸軍の強い要請もあり、徴兵検査までの期間の軍事訓練期間という性格もあり、小学校高等科卒の男子は5年制、女子は3年制でした。

この地方では、農業に差し支えないように農閑期や夜間に授業が行われていました。小学校の先生や専門の先生が授業を担当していました。半ば大人扱いで、同窓会のような場所でもあり、家業から離れてほっとする面もあったと聞いています。

敗戦後の1947（昭和22）年度から新学校制度が発足し、各青年学校は「新制中学校」（現在の中学校）に編成替えされました。

年代ごとの地域コミュニティの役割

明治期から、若者は、「青年会」「処女会」等の名称で家業とは別の組織に入り、村の公共事業への協力や神社の祭り等の準備・運営の中核を担っていました。戦後になっても昭和30年代までは、「青年団」「若妻会」「婦人会」「老人会」等々“地域的サードプレイス”で活躍していました。こうした活動の中で、それぞれがリーダーとして、また、メンバーとしての役割を身に付け、地域コミュニティを維持していました。

全世代型の新たなサードプレイスを！

時代の変化、特に経済環境の激変によって地域コミュニティは衰退していきました。近年、新たな視点でのコミュニティづくりがサードプレイスという観点からも求められるようになってきています。「青年学校」等の歴史を基盤に、すべての世代にとっての新たな居場所づくりが喫緊の課題となっているのではないのでしょうか。

ら・い・さ・まNEWS

学校教育サポートセンターが移転しました！

下野市学校教育サポートセンターが新施設（花の木2-4-12）へ移転し令和7年6月23日から運営を開始しました。児童生徒の就学、不登校など、学校のみでは解決困難な諸課題に対して、教育相談や教育支援を行う機関となります。今年度から月2回社会福祉課の相談員が勤務し、市在住の16～18歳までの子どもに関する相談も受け付けています。下野市では不登校等の児童生徒のための相談や学習の場、保護者の方を支援する様々な制度やサービスがあります。お子さんについての心配ごとや困りごとについて、ぜひサポートセンター相談ルーム「あおぞら」（52-1140）へご相談ください。



編集後記



今回の取材を通して感じたことは、誰でも人生のどこかで自分の居場所を探したことがあるのではないかとことです。家庭の事情や病気等、他人と違った境遇になった時、誰にも解ってもらえない孤独感を抱えながら、人前では明るく振舞って元気なふりをしてしまう。本当は、ありのままの自分でいられる居場所を求めているのに。辛い経験をした人こそ、自分の経験を生かして、同じような人達のために居場所を作ろうとします。その手段は何であれ、目的は、人と人が共感し繋がることにより、心が元気になることだと思います。そして、居場所を提供してもらった人が元気になったのち、今度は提供する側になる。そのような「お互い様の連鎖」で幸せが広がることを願っております。（羽石孝子）

【表紙】シェアスペース WEL